

張承志 “日本留言” に見る対日観

堀 黎美*・下 惟行**

The view of Japan as seen in “Message to Japan” by Zhang Chengzhi

Reimi Hori and Iko Ben

Since China adopted “unnatural” policy of socialistic market economy, it has been, in fact, experiencing the rise of people’s living standard as well as military strength, raising louder international voice.

At the same time, however, more and more domestic contradictions have emerged on the other hand, and, as many thinking people point out, such social reality might be one of the causes of anti-Japan tendency growing in the last several years.

But, it is also true that the views of Japan published in China by authors and journalists who once lived in Japan are affecting rather deeply ordinary Chinese people in their views of Japan; we can not neglect watching carefully such fact.

はじめに

“社会主義市場経済”という不自然とも思われる政策を採用後の中国は、確かに、特に都市住民の生活水準は大幅に向上し、軍事力を筆頭とする国力、国際的な発言力も増している反面、貧富の差を始め、国内の矛盾も激化する一方である。数多くの有識者が指摘する通り、それがここ数年顕著になってきた、反日の原因の一つになっているのも確かであるが、中国国内で発表される。日本で生活をしたことのある中国人作家や作者の対日観も、日本を直接知らない、一般の中国人の対日観に、大きな影響を及ぼしていると思われる。それらを注意して見て、正せる誤解は正していく必要がある。

一

今年も小泉首相の靖国神社参拝が行われた。そのことの是非を今は問わないが、多くの日本人にとって、日本国首相の言動は、必ずしも日本人全体の総意を代表しているとはいえない、という点は、国情の違いもあり中国の人民には理解できないかもしれない。(一国を代表する人の言動が、その国の言動と見られるのは当然でもあるが)

* 教養部 ** 同志社大, 京都学園大非常勤講師

ともかく、日本国首相の靖国神社参拝に対する、中国や韓国などの反応は、もはや“想定範囲内”となってしまうのか。「近年の日中関係の悪化」として、「近年」という言葉を前に置いて、一くくりに語られる事が多くなっている。確かに、特に日中関係の悪化が顕著になったのは、2001年以後の小泉首相の毎年の靖国神社参拝ごとに沸き起こる中国側の非難、西安で野日本人留学生による「寸劇事件」、珠海での男性の「集団売春事件」、昨年のサッカー・アジアカップでの中国人観客の「日本国歌斉唱時のブーイング」、及びその後の韓日感情をむき出しにした一連の騒動と、今年に入ってから日本の国連常任理事国入り動きに反対する、中国の多くの都市での反日でもなどから、日中韓の摩擦の増加によって、日本のマスコミで取り上げられることが増加したせいもあり、最近は多くの日本人が中国に行けば、かの地の反日感情で身の危険に遇うのではないかと案ずるまでに至っている。現に今夏（2005年）日本から中国への観光客は激減するなど、不幸な連鎖が続いている。

しかし実際には、我々は毎年数回中国を訪れ、夏には長期間滞在し、各地を回るだが、日本から来たものとして、特に不愉快な思いをさせられることはない。もちろん、中国語で意味の疎通ができることも関係しているかもしれないのだが。

そうは言っても、夏に中国に滞在することは、日本から来た者にとっては結構厳しい。この季節は、毎年抗日戦争××周年として、テレビや新聞その他で大々的なキャンペーンが行われるのだが、何気なしに見るテレビドラマなど、抗日戦争を題材にしたものが多いのは、時期的に当然としても、敵側の日本を、数年前までは、（正義の側とある）中国側の登場人物が、“日本軍国主義”と言っていたのを、近年は“日本人”と呼ぶようになり、明らかに“日本人そのものが敵だ”という、作り手の意識の変化を如実に感じるのである。

また大衆紙などには、日本人蔑称である“小日本”が多く使われたり、8月15日前後の新聞では、「日本が戦敗したあとの混乱に乗じて、中国は日本を占領できたのだし、そうすべきだった」とか、「将来、中国は台湾に進行した場合、日本は必ず台湾の側に付くだろう」などの、事実からかなり飛躍しているように思える意見が披瀝されたり、やはり潜在的に日本を敵視する報道が多い。

一方、日本においても、大きな書店の中国関係書籍コーナーに行けば、対中国ビジネス関連本よりも、「反中」、「嫌中」と思われるタイトルの本が、恐らく七割位を占めているのではと思えるほど、多く並んでいる。

*このような最近の日中の軋轢は、世論調査にもはっきり表われている。目下、中国人の嫌いな国の第二位を日本が占めているとのこと。（ちなみに一番嫌いな国は、自国中国の由）

では日本はどうかというと、数年前までは中国は好きな国の上位にあったと記憶するのだが、現在は恐らく嫌いな国に近づいているのではあるまいか。

このようなデータや現象面から見えてくる近年の関係悪化は、根本的に民族感情に起因していると考えられる。相手側の不快感や悪感情が、受ける側には、理解も想像もできない事柄もあれば、相手側の誤解、思い込みが原因となっている場合もある。そのような例の一

つとして、中国人作家張承志の日本に対する思いの一端を考察してみたい。

二

まず、張承志とはいかなる人物課、日本とのかかわりはどうなるか、略歴を述べると。

張承志 1948年北京生まれ。回族、男性、作家。清華大学附属中学時代に（1966年）文化大革命が起こり、紅衛兵として関与。彼の著作、「紅衛兵の時代」によれば、彼自身が“紅衛兵”の名付け親だそうである。その後、紅衛兵の活動が尖鋭化し、紅衛兵同士が対立し、敵対派閥から狙われたことなどもあって、1968年四年間、内モンゴルの草原で遊牧民生活を送り、ここでの実体験が、後に彼の作品の原点となった。その後労働兵学徒として北京大学歴史系を75年に卒業、81年に中国社会科学研究所（大学院）でモンゴル史を研究し、歴史考古学修士号を取得、83年と90年に、東洋学術文庫の招きにより研究員として来日、研究生活を送ったほか、81年及び86年にも日本を訪れている。

作家としての出発は「騎手為什麼唱母親」（騎手はなぜ母を唱うのか）で、98年度全国優秀短編小説賞受賞、82年に「大阪」を發表、「黒駿馬」で81～82年全国中篇小説を受賞。83年には「北方的河」が同賞受賞、87年長編小説「金牧場」、90年には「心靈史」などの力作を發表し、高い評価を得ている。それら作品は、彼が内モンゴル自治区のハンウラ生産大隊に下放された（自分が希望して行った？）時知り合った、モンゴル族牧民の美しい心に感化され、彼らと同じゲルに寝泊りし、そのかそくを母や兄と呼んで共に作業を通じて交流を深めていった経験を土台としている。

彼の作風は強い理想主義に彩られており、出発点である清華大学附属中学紅衛兵時代から、一貫して、毛沢東に畏敬の念を抱き続けている。

また、“民族の尊嚴”ということも、彼の心の中大きな位置を占めているのが見てとれる。たとえば、「回教から見た中国」（後出）では、回族が、中国史の中でいかに貢献したかを述べている。

近年の彼の作品は、中国内におけるイスラム回教徒の精神的葛藤や、彼らの魂の美しさを描いたものが多い。「殉教の中国イスラム」（93年、亜紀書房）、「正午のカシュガル」（96年）などがそうである。彼は幼いころから差別、革命、精神など闘争し、続けている人間で、「日本留言」にも、そのような部分が数多く見られる。日本人としては、納得しかねる部分でもあるのだが。

彼は日本に滞在しているときに、「モンゴル大草原遊牧誌」（93年 朝日新聞社）、「紅衛兵の時代」（86年 岩波新書）を、そして、日本語で「回教から見た中国」（93年 中公新書）を書いている。北方アジア史に研究者として来日であるが、こうした事実からも、彼は中国の作家の中でも、実際に日本の地を踏み、生活し、日本に対する一定の理解はしている人物として、「日本留言」を發表したのを見て差しつかえあるまい。

「日本留言」は1994年に書かれ、2001年に中国国内の知識層向け有名誌「読者」

(01年16号)にも再掲載された。

「日本はおかしな国家である。数え切れない人々が彼らに学んだが、最後は彼らと対立する。数え切れない人々が憧れ、飛び込んでいくが、最終的には憎しみをもって彼らから離れていく。彼らは優美な女のようにもあり、吸血鬼のようにもある。(中略)百年以来、二度の侵略戦争を経ても、多くの親日派がまだ生きており、代々あれだけ多くの媚日派が育てられても、中国の基本的世論と心理状態は、日本に対する普通的な反感。今日、簡単に言うならば、私は中国人の日本に対するこのような反感を喜んでいる。たとえそれが口先だけの不満であってもだ」(卞惟行訳、以下同様)と、このような文章は始まるのだが、恐らく彼が日本滞在中に、思うに任せぬことが多々あって、鬱積する不満をぶちまけているのだろうが、「敗戦時、蒋介石が“以德報怨”と称して戦時賠償放棄を宣言したのはまったく誤りであり、今日、日本のマスコミは中国のことを言及するとき、必ずからかい気味な口調であるし、多数の日本人が中国語に対して敬意を持たない」という点など、彼の持つ日本に関する情報量が、非常に限られたものでしかない、と思わざるを得ない。

また彼は、「島国以外のもの一切に対する恐れは根深く、一般の善良な国民もすべて、外国人は早く出て行ってくれと願っている。(中略)私個人の考えではあるが、真に深く感じたことは、日本でもっとも恐ろしいのは二つある。一つは gokibori (注. ゴキブリであろう)。すなわち害虫、もう一つは略称“入管”と呼ばれる入国管理局の人間である。島国の閉鎖性はひどいものであるが、私が見るところ、彼らは少しも閉鎖してあらず、逆に文化小国の恐怖心理が、日本の排外気質を醸成しているのである。これは彼らにとって悲しむべきことで、多くのまじめな日本人は世界と交流し、彼らの歴史と家族史にある侵略者の血を洗い流したいのである。」との論は、やはり首をかしげざるを得ない。もっとも日本の入国管理事務所の、特にアジア系の人に対する態度に問題があることは、私たちも当事者として体験しているから、張承志の怒りも理解できないわけではないが。

いずれにしろ国家権力を行使される側は、どこの国に行っても、あまり愉快的思いはしないのではあるまいか。

三

上記の文に続いて、張承志は、教科書裁判の家永三郎氏の勇気と正義を称え、日本政府の頑なな態度に驚いている。中国人として侵略の記述の有無を批判するのは当然としても、日本は中国と違って一応三権分立であり、国定教科書ではないことをどの程度理解しているだろうか。

もう一点、明らかに見過ごすことはできないのは、「日本赤軍」の把握の仕方である。

「彼ら(注. 日本赤軍)の綱領と目的は非常にはっきりしている。世界革命の根拠地を作り、革命と武装闘争を実行し、中国に対する反動包囲を打破し、パレスチナ人民及びすべての革命と正義の闘争をする。」と述べ、「彼らは何回も日本の首相の乗機に行く手を阻み、中国包囲網反対の世論を喚起しようとし、大型機をハイジャックして大使館を占領し、

捕らえられていた同士を救出した。(中略)私は今に至るも、まじめに記録したこれからの言葉と、彼らが未熟な考えから起こしてた命がけの行動を、読むたびに何度も涙する。」と、日本赤軍の行為が反中国包囲網を打破するための行動と捉えているようだが、このあたりが張承志自身の紅衛兵時代の、“造反有理”に精神を蘇えらせるのであろうか。しかし、中国の日本研究に携わる人、知日派と呼ばれる人の中でも、日本赤軍の行為を肯定する人はそう多くはあるまい。

同じ少数民族である朝鮮族出身の金文学氏は、その著書「中国人民に告ぐ」の中で、中国には“反文化”の伝統がある、と述べている。彼も幼時漢民族の子供にいじめられたことを語り、当時それにどのように対処したかを、漢民族の民族性に関連付けている。

金文学氏は、紅衛兵運動も“反文化”として鋭く批判しているが、まさに張承志とは対極にある考えで、金文学の見方からは、張承志の考え方は“反文化”となるだろう。

いずれにしろ、日本赤軍は犯罪集団であり、破壊活動や殺人まで肯定するのは、日本の侵略や排他性するにしろ行き過ぎで、多くの人の同意は得がたい。

ともかく、内容から察せられるが、この「日本留言」が書かれたのは、かなり前のことであるにもかかわらず、01年夏、小泉首相が始めて靖国神社を参拝した年の、他のメディアでも日本を否定的に悪く書いた記事が多く出た時に、改めて発行部数の多い「読者」に再録された事に自身が現在も同じ考えを持っているのかどうか、聞いてみたいものである。

おわりに

先にも触れたように、張承志氏は高校のときに、紅衛兵の派閥間の争いを逃れて内モンゴル自治区に赴き、遊牧民に家族として迎えられた。その間の経験は、「モンゴル大草原遊牧誌」内蒙古自治区で暮らした四年に詳しく書かれている。そこで彼は後に作家になつた時の貴重な財産を得た。その草原の人達の暖かさと比較すると、日本の都会の生活はかなり殺伐としていたかもしれない。その差は彼自身当然理解していよう。その証明として最後に「モンゴル大草原遊牧誌」から、彼自身の言葉を上げておく。

「ごく普通の、当然と思っていた事柄が、国の違いによって、ときには意外にも理解しにくいものになることがある。このことは、本書の持っている視野に関する限り、日本が私に与えたショックの一つであった。本稿を書き下ろして以後、編訳者の梅村さんと一緒に何回となく補足、改稿を重ねていく過程で、私は海に囲まれた島国の世界と内陸の草原世界とでは、人々の生存のしかた、思考方法に差異があることを実感できたように思われた。このようなところから発する知的欲求は貴重なものであるし、これに応えるべきであろう。この仕事は、大袈裟に言えば「相知」すなわち人類が互いに知り合うという歴史の大河の中の一滴になりはしないだろうかと考えるようになったのである。

自明の事ながら、一つの文化に対する理解、ある観念に対する認識、そしてまた一つの異国に対する理解というものは、決してなまやさしく得られるものではない。

相見時難、相知更難（相手みえること時難く、相知ること更に難し）
すべて、それぞれの人自身に希望を寄せるのみである。」

注釈

* 「中国に親しみを感じる」が03年10月の47.9%から、04年10月の37.6%に、逆に「親しみを感じない」が03年10月の48%から04年10月には58.2%になっている。「内閣府外交に関する世論調査」より。

引用文献

日本留言	張承志著	読者	2001年16期
モンゴル大草原遊牧誌	張承志著	朝日選書	1993年
中国人民に告ぐ	金文学	禅会社	2005年

参考文献

紅衛兵の時代	岩波新書	1992年
しにか	大修館	1998年
中国当代文学辞典	武漢出版社	1993年
中国当代文学史	白帝社	2002年
中国人民に告ぐ		

(平成17年12月2日受理)